

キッズ・マウンテンスクール構想

子供たちを山に引っ張り出したいという思いは、無名山塾創設期から温め続けていたが、忙しさにかまけ、難しさに手をこまねいているうちに今日になってしまった。忙しさは相変わらずだが、山塾創設期の暗中模索からは脱して、やりたいことができることがクリアになって頭に空間ができるようになった現在、子供たちを山に引っ張り出す方法や場作りを考えるべきときがきたのだと感じている。

せんだってリハビリと称して高尾山に出かけた。ウィークデーだったので噂に聞くほどの混雑はなかったが、何グループかの子供たちの遠足と行き会った。段差のある階段を駆け上ったり駆け下ったり、幼稚園児が元気でしっかり歩くのにはびっくりさせられた。中学生は数人ずつのグループに分かれて、バラバラに歩いてくる。見える範囲に先生の姿はない。学校の行事だと思うけど、生徒の掌握はどうなっているのだろう？

彼らを眺めていて、キッズ・マウンテンスクール構想が揺らいできた。段差ある階段を駆け上がったたり駆け下ったりする幼稚園児を自分が管理掌握できるのか。バラバラに行動している中学生を、一人残らず最終ポイントで確認できるのか。幼稚園といい中学校といい、先生方の生徒に対する信頼感、管理能力は凄いなど感心してしまった。

佐伯邦夫さんといえば、劔岳を開拓した魚津岳友会のリーダーとして知る人ぞ知る岳人である。劔岳夏山合宿の帰り魚津で途中下車して、ご自宅にお邪魔するくらいに親しくさせて頂いていた。佐伯宅にお邪魔したある日、邦夫さんとの雑談に奥さまも同席されていた。お二人とも学校の先生であった。奥さまが現役の頃の学校登山引率の思い出話をされた。「一人の生徒が辛いんでしょうね、泣きながら登っているんです。下ってくるまで泣き続けていて、私はそれほどまでして登山させる意味があるのか悩んでしまいました。しかし、卒業するとき一番楽しかった思い出として、彼はそのときの学校登山を挙げたんです。嬉しかったですね。学校登山は素晴らしいイベントだと確信させて貰いました」。この話しも、子供たちを山に引っ張り出したいという思いに大きく影響している。

子供たちを山に引っ張り出すことの教育効果をこちら側は期待してしまうが、子供たちの側は、大人から期待されたり、押しつけられたりするのとはまっぴらゴメンだろう。私塾キッズ・マウンテンスクールがどこに立つ瀬があるのか、暗中模索状況というのが正直なところだ。期待したり心配したりするからいけないのだ、グズグズしてないで立ち上げてしまえばいいのだと、一方の私の声も聞こえてくる。

思い切ってやってしまうか。第1回目は「アウトドア・クッキング教室」、そこで作るのはカレーライスと、そこまでは決まっているのだから…。